

猫車⑤

(1) 「ニャオーン、ニャオー」怪猫のタマは、お千代と孝七をさがしてヤネの上でないいましたが、ふたりはもう家へはかえってきません。

(2) やがて夜があけました。峠をこえて伯父さんのところへいくふたりは今、峠の上でひと休みしていました。「姉ちゃん、早く伯父さんのところへいきたいね」

(3) すると、ゆうべ怪猫とたたかった浪人の秋月ハヤトが峠へのぼってきて、お千代と孝七をみつけると「やッ、あの娘はたしかゆうべの化猫だぞ」

(4) 「あのままにしておいたら、少年はくいころされてしまうかもしれない。よし、化猫を退治して、少年を助けてやろう」と、お千代を化猫とまちがえて

(5) 「おのれ怪物、そこをうごくな」「あれッ、何をなさいます。私はあやしい者ではありません」「あ、姉ちゃんを」「えーいぬかすな、やーッ」

(6) 秋月ハヤトが斬りつけた刀をあやうくよけたものの、にげばをうしなったお千代はガケから谷底へ「オノレ、にげたな」

(7) いきなり侍が出てきて姉さんを谷底へおとしたから、孝七はおこって「やいッ、何ということをするのだ。人ごろしめ」「いや、ちがう。私はお前を助けたのだ」

(8) 「ちがうよちがうよ。姉ちゃんをかえせ」孝七は、隼人にむしゃぶりついていきました。「姉ちゃんが化物なら、ゆうべのうちにオレはくわれている。ズーッといっしょにいたんだ」

(9) 「それは本当か。ウームしまった。少年ゆるせ。オレはゆうべ、お前の姉とそっくりの化物とたたかったのだ…秋月ハヤト一代のしっぱいだ。とにかく姉さんをさがそう」

(10) 仕方がないからふたりはガケからおりてお千代をさがしましたが、お千代はどこへおちたものか。すがたが見えません。果して…